

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A study of the use of mutually interchangeable demonstrative pronouns in Korean and Chinese learners of Japanese : Focusing on the multifunctional SO-A demonstratives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安, 龍洙, AN, Yong-su メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001902

論文

韓・中日本語学習者の非現場指示の使い分けに関する研究

—複数使用可能な指示詞のソ系とア系を中心に—

A study of the use of mutually interchangeable demonstrative pronouns in

Korean and Chinese learners of Japanese

-Focusing on the multifunctional SO-A demonstratives-

安 龍洙

AN, Yong-su

要旨

本研究では、非現場指示コソアにおいて日本語母語話者が複数使用可能であると判断した用法について調査を実施し分析を行った。その結果、以下の5点が示された。(1) 母語の転移に関しては、学習の初期段階でその傾向が最も強い。(2) 非現場指示コソアの使用傾向について、学習が進んだ上級では韓国人学習者と中国人学習者の間に差が縮まるか、なくなる部分が多い。(3) 韓国人学習者は学習レベルによる使用状況の変化に差がはっきり見られたのに対し、中国人学習者は学習レベルによる差がほとんど見られなかった。

(4) 韓・中日本語学習者ともに、ソ系とア系の使い分けには非現場指示の用法間の対立(つまり、日本語の規則)が強く関わっている。(5) 日本語学習者(特に、韓国人学習者)の非現場指示コソアの習得には、母語と日本語の両方の規則が影響しており、学習の初期段階では母語の影響を強く受けるが、学習が進むにつれて徐々に日本語の影響を強く受けるようになる。

キーワード：非現場指示コソア ソとアの使い分け 第二言語習得 韓国人学習者
中国人学習者

1. 問題の所在と目的

日本語の非現場指示コ・ソ・アの選択においては、以下の(a)のように与えられた文脈だけからでは、コソアの三つのうち一つに絞れないという場合がある。

A：先週の日曜日、大学の先輩に会ったんだけどさ。

B：ああ、そう。

A：(a) その人／あの人、ひどいんだよなあ。

B：えっ、どうしたの？

A：サークルの先輩なんだけどさ。自分から飲みに誘っておきながら、飲み代、一銭も出さないんだよ。¹

上記の(a)は同じ人物に対して、「その人」と「あの人」の二つの指示詞が使用される場合であるが、「その人」と「あの人」の使い分けは、話し手が文脈の状況をどう解釈するかによって変わってくる。このような複数使用可能な非現場指示コソアを日本語学習者はどのように使用するのか、また、母語における指示詞体系が異なる学習者同士を比較した場合違いは存在するのか、もしその違いが存在した場合それは学習者の指示詞の習得状況を判断するための有効なデータとなるのか、などに対する疑問が本研究の出発点である。

本研究のように、ある文脈における言語使用に日本語母語話者（以下、JN）の間で可変性（揺れ）が観察される学習項目を、日本語学習者の習得研究に応用した先行研究としては長友（1991）、安（1998）が挙げられる。長友（1991）ではJNの格助詞「が」と「は」の使用における有標、無標の機能が、韓国人学習者（以下、KL）と中国人学習者（以下、CL）の「が」と「は」の習得状況を診断する上で有効であることを明らかにした。

一方、指示詞の習得研究において、指示詞コソアのうちJNが複数使用可能であると判断した用法を、第二言語としての日本語の習得研究に応用している研究としては安（1998）が挙げられる。安（1998）では、指示詞コソアを運用する際、コソア三つのうち、どれを選択するかについて、与えられた文章だけからでは一つに絞れない場合があることに着目して、JNとKLを比較しながら習得研究を行っている。その結果、非現場指示の使用にソ系もア系も可能な場合、KLはJNに比べてソ系を選択する傾向が強いことを示し、KLの指示詞習得における母語の転移の可能性について論じている。しかし、安（1998）では、被調査者がKLのみではほかの母語話者に関しては検討していないため、KL以外の日本語学習者に対しても同様の調査を実施し、その結果と比較しながら学習者の指示詞の習得状況を診断する必要があると考えられる。

そこで本研究では、KLとCLの非現場指示のソ系とア系の使い分けにおける母語と日本語の影響関係について検討するために、JNがソ系もア系も使用可能であると判定した用例を用いて調査を実施し、分析を試みる。調査においては、JN10名の内省による判定に基づき非現場指示のソ系とア系が使用可能な用例を選び、3項対立の指示体系を母語とするKLと、2項対立の指示体系を母語とするCLを対象にした。分析に当たっては、1) 複数使用可能な非現場指示コソアの使用において、使用可能な用法として選択されたものの割合（以下、「使可比」とする）と、2) 1) において選択したもののうち最も適当であると判断したものの割合（以下、「最適比」とする）の二つのデータを用いてKLとCLの習得状況を探り、このデータが日本語学習者の指示詞の習得状況を判断する上で有効な資料になり得るかどうかについて検討する。

2. 調査票作成及び非現場指示の分類

2.1 調査票作成の手続き

本研究のテーマに関わる指示詞コソアの分類に際しては、以下の手続きを経て選定した。まず、非現場指示のすべての問題を作成し、それを JN10 名に判定させ、指示詞コソアのうち使用可能なものをすべて選ぶように指示した。その後、一定の時間を置いてインタビュー調査を実施し、質問紙調査での本人の判定が正しいかどうかについて再度確認する手続きをとった。

以上のような手続きを経て選んだ 2.2 節の用例 (b) ~ (g) は、上記の JN10 名の判定の結果、いずれの JN においてもソ系とア系の両方が使用可能であると判定した場合である。本研究ではこれらの用例について、JN はソ系とア系の両方が使用可能であるという判定ができると考えたため、本調査においては JN を除いて KL と CL のみを対象にした。

次に、本研究で「使可比」と「最適比」の二つのデータを算出し指示詞の習得状況を探った理由について述べる。「使可比」を算出した理由は、JN が非現場指示のソ系とア系が使用可能であると判定した用例について、1) KL と CL はどの程度その判定ができるのか（つまり、「ソア」の選択率）が測れること、2) 日韓、日中の非現場指示ソ系とア系の対応関係による影響がとらえやすくなること、3) そのほかの組み合わせの使用状況も分析することで指示詞の習得状況が多角的にとらえられることが挙げられる。また、「最適比」を算出した理由は、非現場指示のソ系とア系が使用可能な用法に関して、KL と CL にコソアのうち最も適当なもの一つ選択させることによって、日韓（「コ・ソ・ア」対「i·ku·cu」）、日中（「コ・ソ・ア」対「zhè·nà」）それぞれの対応関係が非現場指示の習得に及ぼす影響を明示的にとらえられると考えたからである。

2.2 非現場指示の分類

日本語の指示詞は、コソアのとらえ方及び指示領域の設定などの問題について諸説がある。本稿で採用した宋（1991）は、従来の指示詞コソアに関する諸説を踏まえた上で、KL の指導のために、日韓指示詞の対照分析を行い両者の異同を明らかにしている²。宋（1991）は日本語の非現場指示を独立的話題指示、相対的話題指示、単純照応指示の三つに分類している。2.1 節の手続きを経て得られた用例を宋（1991）の分類に従った結果、1) 「相対的話題指示のソ系とア系」、2) 「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の二つに分類された。

2.2.1 相対的話題指示のソ系とア系

宋（1991）によれば、相対的話題指示は、指示対象が話題性のある経験的なもので、指示対象について話し手と聞き手の両者が共通知識を持っている場合はア系で、話し手と聞き手の両者ともにその知識を持っていない場合、あるいは片方がその知識を持っていない場合はソ系で表される。しかし、下の (b)、(c)、(d) は JN が相対的話題指示のソ系とア系の両方が使用可能であると判断した例である。

(A と B は小学校以来の友達で、今は大学生である)

A: 君, 小学校 3 年の夏休みの時, キャンプに行ったこと, 覚えている?

(b) その／あの時, 君も一緒に行ったと思うけど。

B: (c) その／あの時のことなら, よく覚えているよ。あそこは確か海だったね。

僕, あいにく足をけがして大変だったよ。僕を病院につれて行ってくれた女の先生は元気かなあ。(d) その／あの先生のおかげで助かったけど。

A: そう言えば, そんなことがあったね。³

2.2.2 相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系

宋 (1991) によれば, 独立的話題指示のア系は, 話し手の観念の中にある指示対象について聞き手の存在を意識せず, 平静に指し示すときに用いられる。これに対して, 相対的話題指示のソ系は前述のように指示対象について, 話し手と聞き手の両者, あるいは片方がその知識を持っていない場合に用いられる。しかし, 下の (e), (f), (g) は JN が相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系の両方が使用可能であると判断した例である。

A: あの演奏は実に美しかったなあ。

B: 演奏って?

A: ああ, そう言えば, あなたは (e) その／あの時, いなかったなあ。⁴

A: 吉田さんがもってきたケーキ, まだ残っているの?

B: ああ, (f) それ／あれは道子がとっくに食べちゃったわ。⁵

A: スミスと言う人を知っていますか? 僕は名前を今ちょっと聞いただけで, 何も知らないのですが。

B: ああ, (g) その／あの人はとんでもない人ですよ。⁶

3. データ収集と分析の方法

3.1 解答方法及び被調査者

解答方法は, 被調査者にはコソアの三つの選択肢のうち使用が可能なものをすべて選んだ後, その中から最も適当なものを一つ選ぶように指示した。なお, 指示文は, KL には韓国語, CL には中国語にそれぞれ訳したものを使用した。

被調査者は, 特定のカリキュラムの影響を受けぬよう, KL は韓国の八つの日本語教育機関, CL は中国の六つの日本語教育機関から得た⁷。また, 被調査者の日本語力による問題文理解への影響を考慮し, 調査実施の時点で日本語学習歴 8 ヶ月以上の学習者を対象に

し、別途作成した日本語能力テストの結果から初級、中級、上級の三つのレベルに分けた⁸。このテストで問題文理解に問題があると思われる初級前半の学習者は本研究の対象から除外した。表 1 に被調査者数とその内訳を示す。

[表 1: 被調査者の内訳]

単位: 人 (%)

	初級	中級	上級	計
KL	179(43.6)	138(33.6)	94(22.9)	411(100)
CL	64(19.5)	120(36.6)	144(43.9)	328(100)

3.2 分析の方法

結果は、前述の用例を用いて行った調査の解答を集計した表で示す。本稿では、1) 使用が可能な用法としてのコソアの選択傾向、2) その中から最も適当な用法としての選択傾向、の二つに分けて分析する。それに基づいて、1) KL と CL 両者の日本語レベル（以下、レベルとする）によるコソアの選択状況とその変化、2) 各レベルにおける KL と CL の比較、の 2 点を中心に述べる。また、本研究では指示詞コソアに関するテストの作成に当たって、学習者に複数の問題処理の機会（3 回）を与えるために、上記の 2.1 節の「相対的話題指示のソ系とア系」及び 2.2 節の「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」のそれぞれの分類に、同じ種類の問題を 3 問ずつ配置した。分析に当たっては、KL と CL の非現場指示のソ系とア系の使い分けについて巨視的な観点からとらえるために、これらの問題の平均選択率を算出して使用状況を探る。

4. 結果と考察

4.1 母語の影響に関する結果予測

本節では、KL と CL それぞれの母語における指示詞の規則が日本語の指示詞コソアにどのように影響しているのかを分析するために、日韓、日中の非現場指示の対応関係を紹介する。

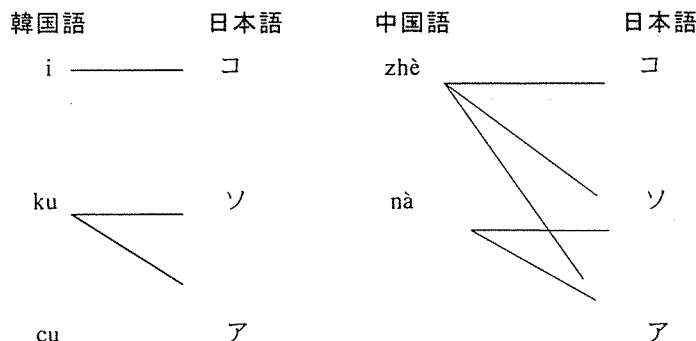
まず、日韓両言語の対応関係であるが、日本語のコ系は韓国語の i 系（コ系）と 1 対 1 の関係にあり、韓国語においても日本語と同じように文脈指示の i 系（コ系）はあまり使われない。これに対して、非現場指示の場合、韓国語ではア系（cu 系）が表れず、日本語のソ系とア系を韓国語においては ku 系（ソ系）一つでカバーしているため、日本語の方が複雑である（宋, 1991）。

次に、日中間の指示詞の対応関係については迫田（1998）が、日本語のソ系文脈指示は、中国語の zhè と nà に対応しており、ア系文脈指示に関しては、一般的には nà 系が使われるが、話し手の指示対象に対する強い感情や強調の気持ちが示されると、zhè 系（コ系）も使われる。日本語では文脈指示用法にコ系があまり使用されないが、中国語の zhè 系（コ系）は日本語のソ系やア系の範囲もその使用範囲に含んでいると述べている。

以上より日韓、日中それぞれの対応関係を図示すると図 1 のようになる。図 1 で分かる

ように、日韓両言語の間では指示詞の対応関係が比較的単純であるのに対して、日中間言語の間ではかなり複雑に対応している。この節では、以上の日韓、日中間の対応関係から「使可比」と「最適比」における母語の転移に関する以下のような予測を立てた。

〔図1: 日韓, 日中の非現場指示の対応関係〕



「使可比」の予測

- 予測 1 ソ系の「使可比」は CL より KL の方が高い。
- 予測 2 ア系の「使可比」は KL より CL の方が高い。
- 予測 3 ソア系の「使可比」は KL より CL の方が高い。

「最適比」の予測

- 予測 4 コ系の「最適比」は KL より CL の方が高い。
- 予測 5 ソ系の「最適比」は CL より KL の方が高い。
- 予測 6 ア系の「最適比」は KL より CL の方が高い。

本稿では、まず全体的な傾向として KL と CL の「使可比」「最適比」の傾向を述べてから、総合的に考察をする。

4.2 相対的話題指示のソ系とア系

「相対的話題指示のソ系とア系」の問題は、2.1 節の (b), (c), (d) の 3 問である。選択肢は「コ」「ソ」「ア」「コソ」「ソア」「コア」「コソア」の七つである。この用法は「ソ」と「ア」が使用可能であるため、正用と言えるのは「ソ」「ア」「ソア」の三つで、誤用に当たる「コ」が含まれる組み合わせは、「コ」「コソ」「コア」「コソア」である。各カテゴリーを別々に集計した結果、「コ」を含む組み合わせについては、期待値不足により χ^2 検定が不可能であった。そこで、本研究では「コ」を含む四つのカテゴリーを「コ群」としてまとめ、「ソ」「ア」「ソア」「コ群」の四つのカテゴリーで比較することにした。

4.2.1 相対的話題指示のソ系とア系の「使可比」の結果

この節では、KL と CL の「相対的話題指示のソ系とア系」のコソアのうち使用可能な用法としての選択の割合（「使可比」）について検討する。

[表 2: KL/CL の「使可比」の結果]

単位: 解答数 (%)

KL	ソ	ア	ソア	コ群	計	CL	ソ	ア	ソア	コ群	計
初	257(47.9)	72(13.4)	152(28.3)	56(10.4)	537(100)	初	43(22.4)	53(27.6)	73(38.0)	23(12.0)	192(100)
中	106(25.6)	121(29.2)	163(39.4)	24(5.8)	414(100)	中	74(20.6)	111(30.8)	153(42.5)	22(6.1)	360(100)
上	46(16.3)	107(37.9)	126(44.7)	3(1.1)	282(100)	上	82(19.0)	147(34.0)	176(40.7)	27(6.3)	432(100)

表 2 は KL/CL の「相対的話題指示のソ系とア系」の「使可比」に関する結果である。表中の数字は、2.1.1 節の (b), (c), (d) の 3 問のテストに対する解答をレベル別に比較したものである。KL ($\chi^2(6)=159.15$, $p<.01$) に関して、「ソア」の「使可比」が初級 28.3%, 中級 39.4%, 上級 44.7% と初級ではかなり低い学習が進むにつれて高くなる。また、学習が進むにつれて「ソ」の「使可比」（初級 47.9%, 中級 25.6%, 上級 16.3%）が低くなるのに対して、「ア」の「使可比」（初級 13.4%, 中級 29.2%, 上級 37.9%）は逆に高くなる。そして、ソ系とア系の両方が使用可能であると判断する（「ソア」の「使可比」）KL が、学習が進むにつれて多くなるが、上級の KL が 50.0% 以下と比較的低い。

CL ($\chi^2(6)=10.35$, n.s.) に関しては、「ソア」の使用率が初級 38.0%, 中級 42.5%, 上級 40.7% とレベルによる差がほとんどない。「ソ」の「使可比」に関しては、初級 22.4%, 中級 20.6%, 上級 19.0% と全体的にかなり低く、レベルによる差も見られない。また、ソアの使用率に関しては KL 同様上級が 50.0% 以下と比較的低い。

KL/CL 間の比較では、初級において、KL は「使可比」として「ソ」の割合が高い（KL 47.9% : CL 22.4%）のに対して、CL は「ア」（KL 13.4% : CL 27.6%）と「ソア」（KL 28.3% : CL 38.0%）の割合が高い（ $\chi^2(3)=43.54$, $p<.01$ ）。特に、KL に関しては、学習が進むにつれてソ系よりア系の「使可比」が高くなる（ソ系対ア系の比率、初級 47.9% : 13.4%, 中級 25.6% : 29.2%, 上級 16.3% : 37.9%）。このように、KL は学習レベルによるはっきりした変化が見られたのに対して CL にはその変化が見られなかった。

4.2.2 相対的話題指示のソ系とア系の「最適比」の結果

この節では、KL と CL の「相対的話題指示のソ系とア系」の「使可比」のうち最も適当な用法としての選択の割合（「最適比」）について検討する。

[表 3: KL/CL の「最適比」の結果]

単位: 解答数 (%)

KL	ソ	ア	コ	計	CL	ソ	ア	コ	計
初	370(68.9)	146(27.2)	21(3.9)	537(100)	初	76(39.6)	96(50.0)	20(10.4)	192(100)
中	194(46.9)	206(49.8)	14(3.4)	414(100)	中	143(39.7)	204(56.7)	13(3.6)	360(100)
上	108(38.3)	173(61.3)	1(0.4)	282(100)	上	162(37.5)	245(56.7)	25(5.8)	432(100)

表 3 は、KL/CL の「相対的話題指示のソ系とア系」の「最適比」の結果である。KL ($\chi^2(4)=105.13$, $p<.01$) に関して、ソ系は初級 68.9%, 中級 46.9%, 上級 38.3% で学習が進むにつれて低くなるのに対して、ア系は初級 27.2%, 中級 49.8%, 上級 61.3% と学習が進むにつれて高くなる。このように、KL の「使可比」「最適比」の両方において学習の初期段階ではソ系の使用率が高いものが、学習が進むに連れてア系の使用率が高くなっており、使用基準の組み替えが行われていることが窺える。

CL に関してはソ系（初級 39.6%, 中級 39.7%, 上級 37.5%）はレベルによる変化がないのに対して、ア系（初級 50.0%, 中級 56.7%, 上級 56.7%）は初級が最も低い ($\chi^2(4)=11.40$, $p<.05$)。KL 同様コ系の選択率はかなり低い（初級 10.4%, 中級 3.6%, 上級 5.8%）。このように、CL は KL とは対照的にレベルによる変化が緩やかであり、「使可比」同様両者の習得プロセスに大きな違いが現れている。

各レベルにおける KL/CL 間の比較（初級: $\chi^2(2)=52.69$, $p<.01$ / 中級: $\chi^2(2)=14.18$, $p<.01$ ）に関して、初級のソ系（KL; 68.9%, CL; 39.6%）は CL より KL の方が高いのに対して、ア系（KL; 27.2%, CL; 50.0%）とコ系（KL; 3.9%, CL; 10.4%）は KL より CL の方が高い。

以上、「相対的話題指示のソ系とア系」は「使可比」, 「最適比」とともに、初級では KL/CL 間に顕著な差が見られており、KL には使用傾向にレベルによる差がはっきりと現れたのに対して、CL には変化が少ないことが最も特徴的な点である。

4.3 相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系の結果

「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の問題は、2.2.2 節の (e), (f), (g) の 3 問に対応する。「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」についても、4.2 節の「相対的話題指示のソ系とア系」同様「ソ」「ア」「ソア」「コ群」の四つのカテゴリーを比較する。

4.3.1 相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系の「使可比」の結果

ここでは、KL と CL の「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」のコソアのうち使用可能な用法としての選択の割合（「使可比」）について検討する。

[表 4: KL/CL の「使可比」の結果]

単位: 解答数 (%)

KL	ソ	ア	ソア	コ群	計	CL	ソ	ア	ソア	コ群	計
初	219 (40.8)	69 (12.8)	146 (27.2)	103 (19.2)	537 (100)	初	37 (19.3)	42 (21.9)	92 (47.9)	21 (10.9)	192 (100)
中	141 (34.1)	79 (19.1)	163 (39.4)	31 (7.5)	414 (100)	中	89 (24.7)	80 (22.2)	146 (40.6)	45 (12.5)	360 (100)
上	88 (31.2)	63 (22.3)	123 (43.6)	8 (2.8)	282 (100)	上	120 (27.8)	111 (25.7)	179 (41.4)	22 (5.1)	432 (100)

表 4 は、KL/CL の「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の「使可比」に関する結果である。KL ($\chi^2(4)=85.96$, $p<.01$) に関して、「ソ」の「使可比」（初級 40.8%,

中級 34.1%，上級 31.2%）は 4.2 節の「相対的話題指示のソ系とア系」同様，学習が進むにつれて低くなる。「ア」の「使可比」についても 4.2 節の「相対的話題指示のソ系とア系」同様で，初級 12.8%，中級 19.1%，上級 22.3%と初級が最も低い。「ソア」の「使可比」についても 4.2 節の「相対的話題指示のソ系とア系」の結果同様，上級の KL が 50% 以下と，この用例が相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系の両方において使用可能であると判断することは難しいと考えられる。

CL ($\chi^2(4)=20.06$, $p<.01$) に関しては，「ソ」の「使可比」は KL とは逆に，初級 19.3%，中級 24.7%，上級 27.8%と上級が最も高い。これに対して，「ア」の「使可比」はレベルによる差は見られず，初級 21.9%，中級 22.2%，上級 25.7%と全体的に低い。このように，「使可比」の学習レベルによる KL，CL の比較では，変化の仕組みが正反対の傾向を見せており，このことから両者の習得プロセスの違いがよく現れている。また，「ソア」の「使可比」については，初級 47.9%，中級 40.6%，上級 41.4%と全レベルで 45%前後と KL 同様この用例が相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系の両方において使用可能であると判断することは難しいと考えられる。

KL/CL間の比較では，「ソ」の「使可比」に関して初級（KL40.8%：CL19.3%），中級（KL34.1%：CL24.7%）でCLよりKLの方が高い。それに対して，初級の「ア」（KL12.8%：CL21.9%）と「ソア」（KL27.2%：CL47.9%）の「使可比」はKLよりCLの方が高い（初級： $\chi^2(3)=50.47$, $p<.01$ /中級： $\chi^2(3)=11.57$, $p<.01$ ）。このように，学習の初期段階では，KLは「ソ」を，CLは「ア」と「ソア」を使用する傾向が強く，KL/CL間では正反対という結果が得られている。つまり，KLの初級段階ではソ系（韓国語のku系）を多く使用するという母語依存型の使用傾向が強いが，学習レベルが高くなるにつれてソ系からア系への使用が多くなる。それに対してCLはこれまでの結果同様，学習レベルによる変化があまり見られず，KLとは対照的である。

4.3.2 相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系の「最適比」の結果

この節では，KL と CL の「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の「使可比」のうち最も適当な用法としての選択の割合（「最適比」）について検討する。

[表 5: KL/CL の「最適比」の結果]

単位: 解答数 (%)

KL	ソ	ア	コ	計	CL	ソ	ア	コ	計
初	344(64.1)	139(25.9)	54(10.1)	537(100)	初	83(43.2)	94(49.0)	15(7.8)	192(100)
中	249(60.1)	153(37.0)	12(2.9)	414(100)	中	185(51.4)	162(45.0)	13(3.6)	360(100)
上	146(51.8)	134(47.5)	2(0.7)	282(100)	上	211(48.8)	213(49.3)	8(1.9)	432(100)

表 5 は KL/CL の「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の「最適比」に関する結果である。KL ($\chi^2(4)=67.78$, $p<.01$) は，学習が進むにつれて「ソ」の「最適比」（初級 64.1%，中級 60.1%，上級 51.8%）と「コ」の「最適比」（初級 10.1%，中級 2.9%，

上級 0.7%) が低くなるのに対して、「ア」の「最適比」(初級 25.9%, 中級 37.0%, 上級 47.5%) は高くなる。この結果からも、これまでの結果同様 KL は学習が進むにつれてソ系よりア系を優先するようになることが分かる。

CL ($\chi^2(4)=13.28$, $p<.01$) に関しては、「ア」の「最適比」(初級 49.0%, 中級 45.0%, 上級 49.3%) はレベルによる差がないのに対して、「コ」の「最適比」は KL 同様、学習が進むにつれて低くなる。しかし、「ソ」の「最適比」(初級 43.2%, 中級 51.4%, 上級 48.8%) は KL とは逆に初級が最も低い。「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」のソ系の「最適比」からも前節の「相対的話題指示のソ系とア系」のソ系の「最適比」同様、KL/CL 間では正反対の結果が得られており、両者の習得プロセスは大きく異なっている。

KL/CL 間の比較では、「ソ」の「最適比」は初級(KL64.1%:CL43.2%), 中級(KL60.1%:CL51.4%)で CL より KL の方が高い。これに対して、「ア」の「最適比」は初級(KL25.9%:CL49.0%), 中級(KL37.0%:CL45.0%)において、「ソ」の「最適比」とは逆に、KL より CL の方が高い(初級: $\chi^2(3)=34.79$, $p<.01$ /中級: $\chi^2(3)=6.00$, $p<.05$)。この結果からも学習の初期段階で KL はソ系、CL はア系を優先する傾向が強いことが分かる。

「最適比」において特に目を引くのは、「相対的話題指示のソ系とア系」ではソ系の「最適比」、ア系の「最適比」ともに初級で差があったものが中級で差がなくなるのに対して、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」では初級同様、中級でも両者の間に差がなくなることである。これは、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」は 4.2 節の「相対的話題指示のソ系とア系」に比べて、学習が進むにつれてソ系からア系への組み替えが遅いことを表すものであると考えられる。これは、非現場指示コソアにおいて、同じくソ系とア系が使用可能な場合であっても、用法間の対立によってレベルによる使用状況の変化が異なることを表す。

そして、KL と CL がソ系とア系が使用可能であると判断した割合(つまり、「使可比」)を見ると、4.2 節の「相対的話題指示のソ系とア系」と 4.3 節の「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の両方において KL, CL とともに、上級でも 50% 以下と低く、この二つの分類がソ系とア系の両方が使用可能であると判断することはかなり難しいと考えられる。

4.4 総合的考察

ここでは、まず 4.1 節の「母語の影響に関する結果予測」の結果を表で示してから、4.2 節及び 4.3 節の結果を踏まえながら、KL と CL の非現場指示の習得について、1) 母語からの影響、2) 母語と日本語の双方からの影響の、二つの観点から総合的に考察する。

表 6 で分かるように、母語の転移に関する予測の結果をレベル別に比較した場合、初級は 12 の項目のうち 11 項目が当たっているのに対して、上級では 12 項目のうちわずか 1

[表 6: 母語の転移に関する予測の結果]

区		相対的話題指示のソ系とア系			相対的話題指示のソ系と 独立的話題指示のア系		
		初級	中級	上級	初級	中級	上級
使 可 比	予測 1	○	×	×	○	○	×
	予測 2	○	×	×	○	×	×
	予測 3	○	×	×	○	×	×
最 適 比	予測 4	○	×	○	×	×	×
	予測 5	○	×	×	○	○	×
	予測 6	○	×	×	○	○	×

*表 6 において、○は予測が当たった場合、×は予測が外れた場合を表す。

項目しか当たっておらず、初級とは対照的である。このことは、学習の初期段階（初級）では学習が進んだ段階（上級）に比べて、母語の転移の影響を受ける傾向が強いことを示すものである。よって母語の影響を最も受けやすいのは学習の初期段階であると言えよう。

次に、学習が進むにつれて母語と日本語がどのように関わってくるのかについて探るために、学習レベルによるソ系とア系の選択率を比較してみる。まず、「相対的話題指示のソ系とア系」では中級の「使可比」「最適比」において KL/CL 間で差がないのに対して、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」ではソ系の「使可比」、ソ系の「最適比」、ア系の「最適比」の三つにおいて KL/CL 間で初級同様差が見られることに注目されたい。これは、KL において、すべて「相対的話題指示のソ系とア系」が「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」に比べて、学習が進むにつれてソ系からア系への組み替えが早いことを表すものであり、KL のソ系とア系の使い分けに用法間の対立（つまり、日本語の規則）が強く関わっていることを裏付けるものである。

KL と CL のソ系とア系の使い分けにおいて、日本語の規則が具体的にどのように関わっているのかを探るために、ア系の結果を見る。KL, CL ともに中・上級では、4.3 節の「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の場合よりも 4.2 節の「相対的話題指示のソ系とア系」の方がア系の選択率が高い。KL について、「使可比」の中級（「相対的話題指示のソ系とア系」対「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」、29.2% : 19.1% ; $\chi^2(3)=14.67$, $p<.01$), 上級 (37.9% : 22.3% ; $\chi^2(3)=46.82$, $p<.01$) と、「最適比」の中級 (49.8% : 37.0% ; $\chi^2(2)=14.81$, $p<.01$), 上級 (61.3% : 47.5% ; $\chi^2(1)=10.09$, $p<.05$) では、それぞれ「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」より「相対的話題指示のソ系とア系」の方がア系の割合が高い。

CL についても、KL 同様「使可比」の中級 (30.8% : 22.2% ; $\chi^2(3)=14.47$, $p<.01$), 上級 (34.0% : 25.7% ; $\chi^2(3)=12.71$, $p<.05$) と、「最適比」の中級 (56.7% : 45.0% ; $\chi^2(2)=10.20$, $p<.01$), 上級 (56.7% : 49.3% ; $\chi^2(2)=17.43$, $p<.01$) において、それぞれ「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」より「相対的話題指示のソ系とア系」の方がア系の割合が高いことが分かった。このことは、KL, CL ともに学習がある程度進んだ中級、上

級では「相対的話題指示のソ系とア系」において、特にア系を優先する傾向が強いことを示すものである。このように KL, CL ともにア系の選択率が低いという類似性を見せており、これは日本語の規則が関わっているためと解釈される。

KL の学習レベルによる習得状況の変化を見るために、初級と上級を比較する。「相対的話題指示のソ系とア系」の「使可比」の初級（ソ系対ア系、47.9%：13.4%）ではソ系の割合が高いのに対して、上級（16.3%：37.9%）ではア系の割合がソ系より高くなる。また、「最適比」（初級 68.9%：27.2%，上級 38.3%：61.3%）においても同様の結果が得られた。これに対して、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」においては「使可比」（初級 40.8%：12.8%，上級 31.2%：22.3%），「最適比」（初級 64.1%：25.9%，上級 51.8%：47.5%）の双方において、初級、上級ともにア系よりソ系の方が高い。この結果を「母語の規則からの影響」という観点から考えた場合、学習の初期段階である初級では韓国語の規則に頼る傾向が強いため、ソ系とア系が使用可能な場合でもソ系を優先的に使用していると解釈される。つまり、KL は学習が進むにつれてソ系よりア系を優先するようになる「使用規則の組み替え」を行っており、その結果、初級と上級の間に違いが現れたと考えられる。

次に、「使用規則の組み替え」を用法間の対立から探してみる。KL は学習が進むにつれてソ系よりア系を優先するようになるが、「相対的話題指示のソ系とア系」が急速に変化するのに対して、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の方は緩やかな変化を見せている。もし、KL が用法間の対立に関係なく、一律にソ系よりア系を優先するようになるのであれば、両者の間にこのような違いは現れないはずである。両者の変化の速さの違いは、用法間の対立の仕方がその原因であると考えられる。つまり、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」は「相対的話題指示」と「独立的話題指示」という、性質の違う二つの用法が対立しているため、ソア間の交替が行われにくいのに対して、「相対的話題指示のソ系とア系」は同じ「相対的話題指示」の中のソア間の対立であるため、交替が比較的行われやすいと考えられる。このような KL の学習レベルによる使用状況を以下の二つに分けて考えることができる。

一つは、学習の初期段階での韓国語からの影響である。これは前述のように、初級では韓国語における指示詞の規則に頼り、ソ系を優先的に使用することである。この段階においては KL の指示詞使用に韓国語が強く関わっていると考えられる。このことは、「相対的話題指示のソ系とア系」の初級におけるソ系の「使可比（47.9%）」、「最適比（68.9%）」、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」の初級におけるソ系の「使可比（40.8%）」、「最適比（64.1%）」からも分かることである。

もう一つは、学習が進んだ段階での日本語からの影響である。KL は学習が進み、文脈指示が韓国語ではソ系のみで表わされるのに対して、日本語ではソ系とア系の両方が使われることに気づき、日韓指示詞の相違点を模索しており、徐々にその影響を強く受け始め

と考えられる。その有力な手掛かりとして、KL は用法に関係なく一律にソ系からア系を優先するようになるのではなく、用法間の対立によって組み替えの程度が異なることが挙げられる。このことは、学習が進んだ段階では、1) 初級での母語依存型の使用ルールに対する反動、2) 日韓両言語の相違点を模索しながら日本語の規則を強く受ける、という二つの要因が関わっていることを示すものであると考えられる。

一方、CLにおいても、「日本語の規則からの影響」と思われる特徴が現れた。CLの「使可比」「最適比」に関するソ系とア系の比率に注目したい。「相対的話題指示のソ系とア系」においては、「使可比」（ソ系対ア系<表2参照>；初級 22.4%：27.6%，中級 20.6%：30.8%，上級 19.0%：34.0%），「最適比」（ソ系対ア系<表3参照>；初級 39.6%：50.0%，中級 39.7%：56.7%，上級 37.5%：56.7%）ともに、全レベルにおいてソ系よりア系の方が高い。しかし、「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」においては、「使可比」（ソ系対ア系<表4参照>；初級 19.3%：21.9%，中級 24.7%：22.2%，上級 27.8%：25.7%），「最適比」（ソ系対ア系<表5参照>；初級 43.2%：49.0%，中級 51.4%：45.0%，上級 48.8%：49.3%）ともに、ソ系とア系の比率に差がほとんどないか、ソ系の割合がやや高いケースがある。このことは、CLにとっても「相対的話題指示のソ系と独立的話題指示のア系」に比べて「相対的話題指示のソ系とア系」の方が、ア系としてとらえやすいことを意味する。

KL、CLの学習レベルによる変化の程度の違いを日韓、日中の対応関係から考えると、日韓両言語の対応関係が比較的単純であるため、ソ系でうまくいかなかったらア系を使ってみるというふうに「使用規則の組み替え」が比較的自由に行われていると考えられる。それに対して、日中の指示詞体系は、図1に示したように非常に複雑に対応しているので、CLは指示詞コソアを複雑な構造としてとらえていると考えられる。そのため、(コ)ソア相互間の交替が起きにくく、KLとは対照的に学習段階による変化が極めて緩やかであると考えられる。

以上、本研究では、非現場指示ソ系とア系が使用可能であると JN が判断した用法について、KL と CL を対象に、1) 使用可能な用法として何を選ぶのか、2) 1) で選んだもののうち最も適当な用法としては何を選ぶのか、の二つの観点から探ってみた。この結果を、先行研究の申（1985）、迫田（1996、1997）、安（1996、1998）、上垣（1997）などで議論されている母語の影響という観点から考えた場合、たとえ学習が進んだ段階での KL と CL の非現場指示の使用傾向が似ていても両者（KL と CL）が第二言語として使用している日本語はかなり違う可能性が高いことを強く示唆するものである。このことは、KL と CL が同じ非現場指示を習得しても実際に経験することや抱えている問題点はかなり異なっている可能性が高く、非現場指示ソ系とア系の使い分けには母語と目標言語（日本語）のルールが同時に関わっていることを示すものであると考えられる。

4.5 まとめと今後の課題

本研究の結果を以下にまとめる。

(1) KLは初級では母語のルールに頼る傾向が強いが、学習が進むにつれて日本語のルールの影響を強く受けるようになる。それに対して、CLは学習の初期段階から日中両言語の複雑な対応関係の影響を比較的強く受けると考えられる。

(2) KLは学習段階によって習得状況が規則的に変化するのに対して、CLは学習が進んでも習得状況に変化があまり見られない。

(3) 非現場指示コソアの使用傾向について、学習が進んだ上級ではKLとCLの間に差が縮まるか、なくなる部分が多い。

(4) KLとCLの非現場指示の使い分けには学習者の母語（韓国語、中国語）と目標言語（日本語）の規則が同時に関わっていると考えられる。

(5) 学習が進んだ段階（特に上級）においてKLとCLが同じような非現場指示の使用傾向があっても、その中間言語体系が異なる可能性が示唆された。

以上、本稿ではJNがソ系とア系の両方が使用可能であると判断した非現場指示コソアをKLとCLがどのように使い分けるのかについて検討した。その結果、KLとCLの学習レベルによる比較において興味深い結果が得られた。また、本研究で採用した研究手法は、誤用率・正用率を算出して学習者の習得状況を診断している従来のアプローチとは異なっている。そして、データの分析結果からも分かるように、本研究のような研究手法が学習者の第二言語の習得状況を判断する上で有効である可能性が高い。本研究と関連して今後の課題について、以下の三つを挙げておきたい。

(1) 分析資料について:本研究では、テスト作成にあたって、学習者に複数の問題処理の機会（3回）を与え、分析においてはテストの平均選択率を算出して使用状況を探った。しかし、KLとCLの非現場指示の使用状況をより詳細に調べるためには、問題数を増やし問題ごとの使用状況を探るなどより幅広い観点から検討する必要がある。

(2) CLの学習段階による変化:本研究では、学習段階による使用状況の変化をとらえるために、初級、中級、上級の三つの段階を設けKLとCLそれぞれの学習段階による変化を探ろうとした。その結果、KLに関しては極めて規則的に変化するのに対して、CLは学習が進むにつれて非現場指示のコソアの誤用が緩やかに減少すること以外は、目立った変化が見られなかった。今後、「CLの学習レベルによる使用傾向の変化の少なさ」についての更なる検討が必要であろう。

(3) JNを対象にした追跡調査:本研究では調査票の作成に当たって、JN10名の内省による判断に基づいて非現場指示のソ系とア系が使用可能な用例を選定したため、KLとCLのみを対象に調査を行った。しかし、学習者の言語体系をより客観的にとらえるためには、同様の問題に対するJNのデータも比較対象にする必要がある。今後、JNも調査の対象にした上

で、学習者のデータと比較しながらもっと議論を深める必要があるだろう。

注

¹ 筆者作例によるものである。

² 宋（1991, 137-138）は日本語の指示詞の研究について、「コ・ソ・ア」が指示性を持つ言語形式である限り、その指示範囲、意味、機能は必ずどこかで区分されているはずである。古くからの「近称・中称・遠称」説、「なわばり」説、「コ／ソ、コ／ア」の二項対立の複合」説、または比較的最近の「親近・疎遠・親遠」説、「対立、複合型の複合」説、「相対的知識」説等が、「コ・ソ・ア」の用法の概念規定を巡る有力な文法論として今日まで認識されているようである。（中略）最近になるにつれて「コ・ソ・ア」は、談話レベルの問題として、話し手（あるいは書き手）の心理的態度と深い関係を持つものであることの重要性が強調されているようである。そこで、本稿では、上記の諸説を踏まえた上で、新たな試みとして、日本語教育のための「コ・ソ・ア」の用法を次の四つの仮説に基づいて考える」と述べている。詳しくは、宋（1991, 136 - 152）を参照されたい。

³ 筆者作例によるものである。

⁴ 金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）を参考に筆者が作成したものである。

⁵ 金水敏・木村英樹・田窪行則（1989）によるものである。

⁶ 正保（1981）によるものである。

⁷ 韓国は、1) 東亜大学校、2) 釜慶大学校、3) 大田産業大学校、4) 新羅大学校、5) 仁斎大学校、6) 東義大学校、7) 慶北大学校、8) クラーク日本語学院の八つの日本語教育機関である。中国は、1) 北京大学、2) 北京外国語大学、3) 北京第二外国語大学、4) 遼寧師範大学、5) 北京郵電大学、6) 南開大学の六つの日本語教育機関である。

⁸ 日本語能力テストの問題は、平成9年度「日本語能力試験」の「文字・語彙」、「読解・文法」の部分から選んだ。問題の内訳は1級5問、2級5問、3級5問の計15問で、この「日本語能力試験」に関する問題集や解説書などは調査時（98年11月中旬～12月下旬）には韓国、中国のいずれにおいても市販されていなかったため、学習者が問題を入手した可能性はない。なお、学習者のレベル分けは、上記の日本語能力テストの結果に基づいて行い、4点～7点を初級、8点～11点を中級、12点～15点を上級とした。

参考文献

- 安龍洙（1996）「韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得における母語の影響について―非現場指示の場合―」『日本語学科論集』6, 1-12, 東北大学文学部
- 安龍洙（1998）「韓国人学習者の非現場指示の「コ・ソ・ア」の習得過程研究―語用論的な観点から―」『文化』62-1・2, 54-65, 東北大学文学部
- 安龍洙（2001a）「日本語学習者の指示詞の使用意識に見られる特徴―韓国人学習者と中国

- 人学習者を比較して一」『第二言語としての日本語の習得研究』4, 5-22, 凡人社
- 安龍洙 (2001b) 「韓・中日本語学習者の指示詞の使用に関する一考察—コ系・ソ系・ア系のすべてが使用可能な場合—」『文化』65-1・2, 78-98, 東北大学文学会
- 上垣康与 (1997) 「日本語学習者の指示詞使用—文脈指示のコ・ソ・アの選択—」『九州大学留学生センター紀要』8, 27-40, 九州大学留学生センター
- 大神智春 (2000) 「タスク形式の違いによる中間言語の可変性」『第二言語としての日本語の習得研究』3, 94-110, 凡人社
- 金水敏・木村英樹・田窪行則 (1989) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ 4—指示詞一』くろしお出版
- 迫田久美子 (1993) 「話し言葉におけるコ・ソ・アの中間言語研究」『日本語教育』81, 64-75, 日本語教育学会
- 迫田久美子 (1996) 「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程—対話調査による縦断的研究に基づいて—」『日本語教育』89, 57-70, 日本語教育学会
- 迫田久美子 (1997) 「日本語学習者における指示詞ソとアの使い分けに関する研究」『第二言語としての日本語の習得研究』創刊号, 凡人社
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究—日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得—』溪水社
- 申恵環 (1985) 「第二言語としての日本語習得における『コ・ソ・ア』の問題」『言語の世界』2-2, 97-111
- 正保勇 (1981) 「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』51-122, 国立国語研究所
- 宋晩翼 (1991) 「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究—『コ・ソ・ア』と『0・コ・ヂ』との用法について—」『日本語教育』75, 136-152, 日本語教育学会
- 長友和彦 (1991) 「談話における『が』と『は』とその習得について—Systematic Variation Model—」『日本語シンポジウム:言語理論と日本語教育の相互活性化』予稿集 10-24, 津田日本語教育センター
- 長友和彦 (1999) 「第二言語としての日本語の習得研究—概観, 展望, 本科研究の位置づけ—」9-41, 研究代表者 カッケンブッシュ・寛子 『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(A)(1) 課題番号 08308019
- 日本国際教育協会・国際交流基金 (1998) 『平成9年度 日本語能力試験 1・2級試験問題と正解』凡人社
- 日本国際教育協会・国際交流基金 (1998) 『平成9年度 日本語能力試験 3・4級試験問題と正解』凡人社
- 森敏昭・吉田寿夫 (1990) 『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』北大路書房